

第2節 弥生時代の人形土製品

本書で報告する調査区では2点の人形土製品(90・784)が出土した。90は第28次調査SR01の7-12区部分の埋土中位、784は第29次1区SR01で出土した。90と784の出土地点は170mほど離れているが、いずれのSR01も連続する同一の河川である。この河川は普通寺病院調査区内を南から北に向かって蛇行しながら走る。弥生時代中期後半に大部分が埋没することから、90・784も弥生時代中期後半のものと考えられる。

90は人形土製品の頭部だけで、体部以下は欠損している。目と口をヘラ状工具による線状の凹みにより眉・目・口を、鼻は粘土の隆起により立体的に表現されており、頭部の長さは3.1cm、幅2.6cmである。頭部の髪の毛や、顔の入れ墨表現はみられない。また、784は人形土製品の体部片で、頭部と脚端部を欠損している。胸には乳房の表現と考えられるふくらみがみられ、人間の体部を立体的に表現している。現存の長さは5.2cm、最大幅3.0cmと小さい。また、人間の表現はいずれも簡素なもので、衣類やアクセサリー、入れ墨の表現は見当たらない。90・784の胎土は橙色を呈し、旧練兵場遺跡で出土した土器の一般的な胎

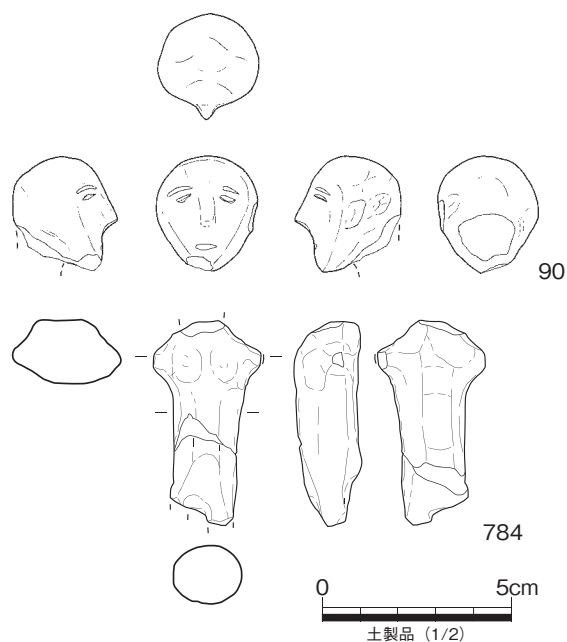


図 367 旧練兵場遺跡出土人形土製品 (1/2)

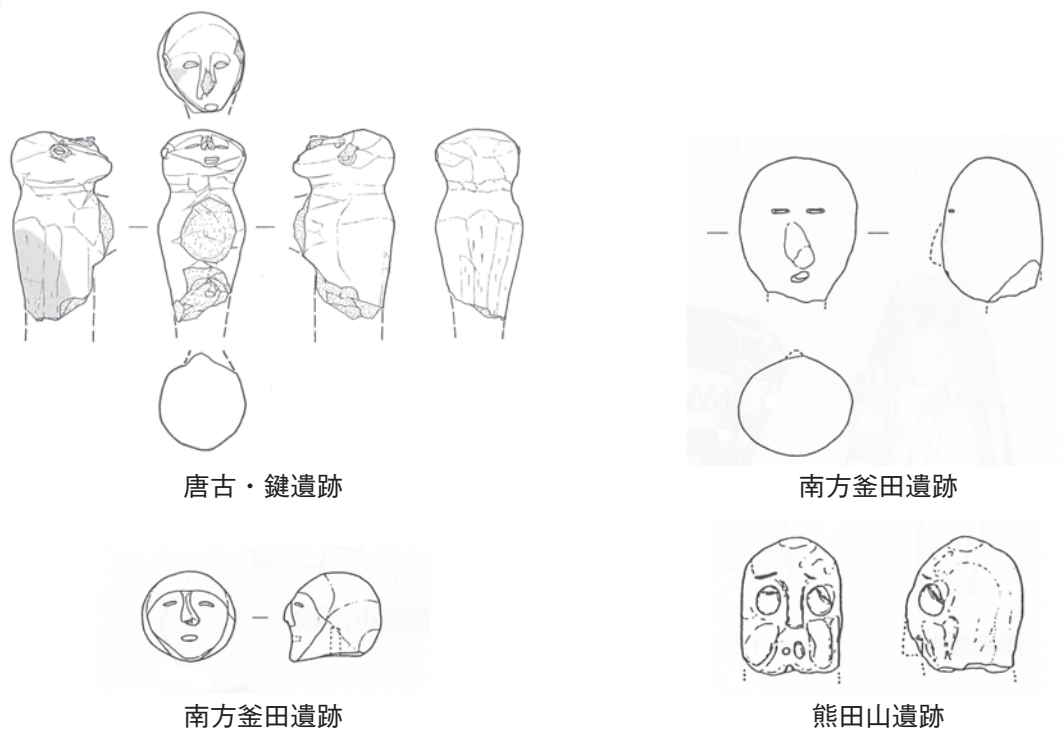


図 368 各地で出土した人形土製品 (1/2)

土であることから、遺跡付近で作られたと考えられる。これらの胎土は似通っているが、色調がやや異なり、接合面はないことから、同一個体とは判断し難いが、90には784のような体部、784には90のような頭部が本来あったものと考えられる。

このような人形土製品は過去の旧練兵場遺跡の発掘調査では出土していない。また、『旧練兵場遺跡Ⅴ』でも報告したとおり、建物を描いた弥生時代中期後半の絵画土器（報告番号1671）が同河川の30mほど上流から出土しているが、人物を描いた絵画土器は出土していない。なお、昭和60年に行われた善通寺市教育委員会の調査（第3次調査）では弥生時代後期の箱式石棺が検出されたが、蓋石に人物の顔が線刻で描かれていた。

90・784のような弥生時代中期の簡素な人形土製品の出土例は近県でも数例みられる。瀬戸内海を挟んだ岡山県では岡山市の南方（済生会）遺跡、南方釜田遺跡、瀬戸内市熊山田遺跡⁽¹⁾や、石川県小松市八日市地方遺跡⁽²⁾で出土している。熊山田遺跡・南方釜田遺跡の人形土製品は首には割れ口がみられ、本来首から下があったことがうかがわれる。また、南方（済生会）遺跡例は頭部の長さ2.4cm、幅2.6cmで、首の付け根に当たる部分に円孔がある。これは細い棒状のものが差し込めるようになっており、別個体の体部を接合させていたものと考えられる。南方釜田遺跡例は頭部の長さ3.6cm、幅2.6cmである。

また、弥生時代後期に属するものであるが、奈良県では唐古・鍵遺跡⁽³⁾の人形土製品（第61次調査出土）の顔の表現も旧練兵場遺跡と同様簡素なものである。体部の一部を欠損しているものの、頭部と体部がみられ、残存高さ5cm、幅2.7cmである。手足の表現はみられず、体部の胸に当たる部分は欠損しており、乳房の有無は不明である。頭部は丸く、顔は上向きで逆三角形、目と口は線刻、鼻は突出で表現されている。

旧練兵場遺跡90・784は同一個体とは判断し難いが、唐古・鍵遺跡例のように本来は頭部から体部まであったものと考えられる。このような人形土製品は非実用的なもので祭祀に係る道具と考えられるが、旧練兵場遺跡と同様、出土遺跡はいずれも拠点集落に当たる。人形土製品の出土からも旧練兵場遺跡での祭祀のあり方も各地の拠点集落の影響を受けていたことがうかがわれる。

註

1『邑久町埋蔵文化財発掘調査報告1 熊山田遺跡 吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う発掘調査』2004 邑久町教育委員会

2『八日市地方遺跡1』2003 小松市教育委員会

3『田原本町文化財調査報告書第5集 唐古・鍵遺跡Ⅰ―範囲確認調査― 特殊遺物・考察編』2009 田原本町教育委員会

第3節 旧練兵場遺跡の古代

旧練兵場遺跡善通寺病院調査区では図364・365のとおり、7～10世紀の古代の集落が検出された。7世紀の集落は竪穴建物と掘立柱建物で構成され、善通寺病院調査区（南北約200m、東西約150m）の中央からやや南（『旧練兵場遺跡Ⅲ』で報告された調査区の北部から『旧練兵場遺跡Ⅴ』調査区の南部）に集中する。8世紀の集落は掘立柱建物で構成され、7世紀の集落のやや北部（『旧練兵場遺跡Ⅲ』調査区の北端・『旧練兵場遺跡Ⅴ』調査区）に集中する。7世紀の建物の主軸方向は様々であるが、最も多いのは南東から北西方向のものである。8世紀の建物は善通寺病院調査区の南部では南東から北西方向のものが多く、調査区中央やや北寄りでは第1節で報告した「逆コの字状」の溝と平行し、ほぼ南北に向くものが多い。第1節でも記したとおり8世紀末頃を境に建物や溝の方向は、現在も付近に残る条里型地割に合致するようになる。8世紀末から9世紀の集落は善通寺病院調査区のほぼ中央（『旧練